

解答と採点基準

問1 ①＝(宮は) 便りもなさらぬ

②＝どうなつてしまったのであろうか

③＝(今頃はきっと) 夜がしだいに更けているのであろうか

④＝あなたは見ているか

問2 宮のことを思い寝られない夜を過ごしていたところ、宮からの手紙が来た

ので、自分の気持ちが宮に届いたのだろうかと思つたから。

A がなければ全体0。

A＝6 / B＝4

問3 (今頃は) きっと夜も更けているだろうと思うものの、宮のことを思って

眠れません。月を見るとかえつて物思いが募つてつらいので、あえて月だけ

は見ておりませんでした。

CとDの内容がおおむねそろつていなければ全体0。C・Dが答えてあつた上で採点する。

Aのうち「ぬらむ」の強意の現在推量の訳になっていないものは減点2。

2。「ものから」の逆接のないものは減点2。

Bのうち「宮のことを思つて」のないものは減点2。

Cのうち「しも」の強意の訳がないものは減点2。

問4 和泉式部からは「わたしも月を見ている」といった内容の歌が返ってくる

と予想していたのに、「月を見ていない」というまったく逆の内容だったので、

意表をつかれた思いでかえつて式部に心惹かれたから。

A・B・Cが順番にそろつて記述されていないものは全体0。

Cの「心惹かれた」は、「興味をもつた」「魅力を感じた」なども可。

問5 自発の助動詞「らる」の連用形

問6 エ

中古の女流日記

作者と宮(敦道親王)との間に、「月」をめぐる贈答歌の応酬が絶妙に交わされた場面の読解が求められている。宮は、毎夜作者を訪ねていたのか、二、三日の無音を思うと夜も眠れない。ところが突然の宮からの文が届く。思いが通じたのかとうれしく思つて、歌を見ると、「月を見ているか」との問いかけの歌だった。作者は「今日に限つてあえて物思いを誘う月は見えない」と、宮の意表をつく返歌で切り返す。こんな時は、「あなたのご覧になつている月を私も眺めてはあなたを偲んで恋しく思つています」と詠むべきなのに、和泉式部はまったくちがった。宮への並々ならぬ激しい思いを「月は見えない」と切り返すことで伝えた。どちらにしても月は

物思いを誘う。宮を思つて物思いに沈んで切ないところへ、月を見ればさらに恋しくて恋しくつらくなるではないか、というのである。しかし、宮は身分の隔たつた(注)、年上の式部に心惹かれることになつた。問4が解答できれば読解が完成したことになるが、とても難解。(注)をヒントにして、なんとかまとめなければならぬ。

【考察】

【疑問】(現代語訳)

それぞれ品詞分解してみる。

Point 品詞分解

① 音もせ させ たまはず

② いかになりぬるにか

「音もせ(す)」「だから「音をする」のである。二、三日、何をなさらぬのか?と考える。一行後に「宮の御文なりけり」とあるから、「便り」である。最高敬語の「させたまふ」(主語は(注)を参考に宮と判断する)にも注意して、「便りもなさらぬ」と訳す。

Point 品詞分解

② いかになりぬるにか

「どう、どのように」の「いかに」に動詞の「なる」が付いて「どのようになる」と訳す。「いかに宮は頼りになる、つまりあてになることをおっしゃつたのに、それもいっただいどうなつたのか」ということ。断定の「なり」の連用形「に」に疑問の「か」の付いた「であろうか」「さらに完了の「ぬる」を忘れず「しまったのであろうか」の訳に注意。完了の「ぬ」の連体形「ぬる」に続くので、「どうなつてしまったのであろうか」と訳す。

Point 品詞分解

③ 夜やうやうふけぬらむかし

作者は寝つかれずに寝所で、今はもうしだいに夜も更けてしまつたらうと現在を推量するのである。「しだいに、だんだんと」の「やうやう」は基本重要語。文末に「ヨ、ナア」を添えることを忘れないこと。

④＝「君見るや」の逆転形。歌に乗せるための言い方。「や」は疑問。「あなたは(このわたしが)見ている月を) 見ているか」と訳す。

問2 (理由の説明)

思いもかけない時刻の宮からの手紙なので、「あはれにおぼえ(しみじみとう

れしく思われ)」「たわけである。直前の「心や行きて(気持ちが通じたのか)」「から、まず解答を作る。

解答の骨格

(宮を思う) 気持ちが(宮へ) 届いたのだろうかと思つたから。

+

根拠(なぜ心が宮へ届いたのか?)

＝宮からの手紙が来たので。

「宮のことを思い寝られない夜を過ごしていたところ、宮からの手紙が来たので、」に続けるかたちで解答を作る。

◎問3 (和歌の現代語訳)

「わたしの見ている月をあなたは見ているか」との宮の問いかけに、「月は見えていない」と返したことをとらえることができれば、あとは上から散文的に直訳をする。

Point 品詞分解

A ぶけぬらむと思ふものから/B寝られねど

C なかなかなれば/D月はしも見

便宜上、逆接の「ものから」「と」、接続助詞の「は」を切れ目に四分割にして訳してみる。

Aは傍線部③を踏まえて、「夜がきつと更けてきているだろうが」と訳す。「ぬ(強意(完了ではない))らむ(現在推量)」となつているから、「してしまつてい

「眠れないけれども」と訳す。さらにここで、なぜ眠れないのか、その理由を加えて訳すとよりベター。「便りもよこさない宮を思つて眠れないけれども」とするのだ。

難解なのはC。そのまま訳せば「かえつてなので（已然形＋ば）」「あるいは中途半端なので」となる。Dとの関連で考えてみる。かえつて月を見るとどうかなるから見ない、（月を見ると中途半端なので見ない」と考えてもよい）ということ。宮も見てこの月を、宮を思つて見たところで逢うこともできないで、思いが増してかえつてつらくなるから、と解釈できる。

Dは「月は見ない」だが、直前の月を「し（副助詞）も（係助詞）」で強めた「あえて月だけは見ない」と訳す。

◎問4（文章全体の理解）

（宮の歌）：「秋の夜の月を」見るや君

←
（わたしの歌）：「月はしも見ず」

「あなたの見ている月をわたしもあなたを恋しく思つて見えています」との返事かと期待していたところが「月はしも見ず（見ていません）」の作者の返歌に、「おしたがへたる（意表をつかれた（注））心地（思い）」がして「くちをしくは」（傍線部C）気持ちが出たということ。

「くちをし」は期待がはずれて不満な感じをいう語で、「残念。悔しい」と訳しがちであるが、ここは、意表をつかれた作者の行為、人物そのものに対する感情だから、「つまらなくはない（女）」ととるべきだろう。宮にとって期待はずれではあったものの、並みの女のする返事ではなかったことに心惹かれる思いがしたわけである。

それではなぜ心惹かれたのかまで穿鑿せんさくしたくなるけれども、問われていることは、「意表をついた返事に心惹かれたから」までである。「月は見ない」と切り返すことで宮への並々なぬ思いを言うのが作者の真意である。月は見ているだけ

【現代語訳】

こうして、二、三日（宮は）なんのお便りおづからもなさらない。期待できそうにおっしゃったことも、どうなつてしまったのであろうかと思いつづけると、眠ろうにも眠ることができない。目を覚まして横になつてみると、夜がしだいに更けているのであろうよと思うところに、門を叩く（音がする）。ああ（誰かしら）思い当ることがなかつたけれど、（取り次ぎの者に）尋ねさせると、宮からのお手紙であつた。（夜も更けて）思いもかけない時刻なので、「気持ちを通じたのか」としみじみとうれしく思われて、妻戸を押し開け（させ）て（お手紙を）見ると、

あなたは見ているか。夜が更けて山の端（近く）に曇りもなく澄んでいる（わたしは）見ている。秋の夜の月を。

自然と（月が）眺められて、普段よりも（宮のお歌が）しみじみと感ぜられる。門も開けていないので、（宮の）使者は待ち遠しく思っているであろうと思つて、ご返歌を差し上げる、

（今頃は）きつと夜も更けているだろうと思うものの、（宮のことを思つて）眠れません。月を見るとかえつて物思いが募つてつらいので、あえて月だけは見ておりませんでした。

と（詠んで）あるのを、（宮はわたしと同じ月を見て宮を偲んでいます、という歌を返歌してくれるであろうと予想していただろうが）意表をつかれた気持ちをして、「やはり（あの女は）つまらぬ女ではないことよ。なんとかして身近において、こういう（なんにもならない）気慰めの和歌でも詠ませて聞きたいものだ」とこ決心なさる。

【作品（作者）解説】

和泉式部が書いたものだと言われている。亡くなった恋人なみか為尊親王の弟である帥宮そしのみや敦道親王からの手紙をきっかけに始まった恋の進展を描いている。一〇〇三（長保五）年四月から翌年正月までの十カ月わたつてゐる。二人の贈答歌一四五首を中心に、時間の経過に従い夏から秋・冬にかけての季節の変化を織り交ぜながら心の交感を綴つづっている。女主人公である和泉式部が「女」と第三人称で書かれていて、日記ではあるが物語の性格をもっている。

でも物思いを誘うものなのである。宮を思つて物思いに沈んでいるのに、そのうえに物思いを誘う月なんて見ない、というのである。

問5（文法）

助動詞の「らる」の連用形。受身、可能、自発、尊敬のいずれであるかを吟味する。宮の歌に「秋の夜の月」が歌われているので、宮の見ている月と同じ月に自然と目がいったというのである。「月が思わず眺められて」で自発。受身と可能ではないから、自発と尊敬で判断することになるが、動作の主語が「わたし・作者」なので尊敬でもないことからもおおよその判定は可能である。

問6（文学史）

だいたい平安時代の文学史、とくに女流文学に関するものは女流日記を軸に、そして『源氏物語』より前か後かをあてはめてやれば答えが出てくる。すなわち古いものから順に、土佐（ト）↓蜻蛉（カゲ）↓和泉式部（イズミ）↓紫式部（ムラサキ）↓更級（サラ）。それに『源氏物語』を重ねる。和泉式部と同じく中宮彰子に仕えたのが紫式部であるから、『和泉式部日記』は『源氏物語』と同時代になる。紫式部と選沢枝えだの清少納言は仕えた主人こそ違つた（清少納言は中宮定子、世代的には半世代十年前）が、同時代の人物である。

アの額田王は万葉集時代、紫式部よりずっと前。

イの式子内親王は新古今集の人。紫式部よりずっと後。

ウの小野小町は古今集の人、平安初期で紫式部より百五十年前。

オの日記『とはずがたり』の作者後深草院二条は、鎌倉中期『十六夜日記』の阿仏尼よりさらにあとの鎌倉末期の人。先の平安女流日記より後ということになる。『十六夜日記』までは文学史の常識として知っておくべきだが、後深草院二条は必要ない。むやみに難化させるための選沢枝。

【参考】

『和泉式部日記』は、作者と兄弟の皇子との関係を、知識を前提に読まなければ困難であるが、それがリード文と注で処理されていれば、贈答歌を軸に入試問題の本文として短文で採用しやすい。国立大二次試験に例年出題されている。どれも良問である。